

日本臨床腫瘍薬学会 がん診療病院連携研修

コアカリキュラム

1. 研修の到達目標

本研修は、外来がん薬物療法に関して、数多くの臨床経験を積むとともに、高度な知識や専門的技術を修得し、病院と薬局との連携について理解することを目標とする。

目標 A：がん医療における薬剤師の役割を理解し、医師、看護師、栄養士などの医療従事者との連携の必要性を理解できる。

目標 B：患者に良質かつ安全ながん薬物療法を提供するため、外来化学療法中の個々の患者の状態を的確に把握するとともに、抗がん薬の種類、投与量、投与期間等の設定・変更や支持療法の選定などを医師に提案できる。

目標 C：外来がん薬物療法における病院と薬局の連携システムを理解し、自施設での連携の質的向上に貢献できる。

目標 D：曝露対策の必要な抗がん薬の取扱いなどに関する知識を修得し、自施設の曝露対策に活用することができる。

目標 E：患者や家族などからのがん薬物療法に関する相談に、わかりやすい言葉で説明できる。

目標 F：国内外のがん医療に関する最新の情報収集を行い、活用することができる。

2. 実地研修で修得する事項

研修者は、到達目標に従い以下の項目について研修病院での実地研修にて、見学、知識の修得および技能の修得を行う。

- ・ 見学：実地研修中に見学する。
- ・ 知識：実地研修で修得した内容を説明でき、自施設での取り組みに活用できる。
- ・ 技能：実地研修中に修得した知識を生かして、実際に研修病院で実践できる。
 - (ア) 研修病院で実施される診療科カンファレンス、カンサーボードなどに参加し、がん治療における薬剤師の役割を学ぶ。(目標 A：見学・知識)
 - (イ) 栄養相談、がん相談など他職種が行う患者相談の場を見学することが望ましい。(目標 A：見学)
 - (ウ) 研修病院におけるレジメン管理の方法、運用を学ぶ。なお、レジメン審査を行う委員会等へ同席することが望ましい。(目標 B：知識)
 - (エ) がん患者の治療全体を把握した上で、がん薬物療法に用いられる薬剤の特性に応じて、継続的に患者の状態を適切にモニタリングする。(目標 B：知識・技能)
 - (オ) 腎機能、肝機能、血液学的検査などの指標に基づいて、抗がん薬の種類、投与量、投与期間等の変更を検討する。(目標 B：知識・技能)

- (カ) がんまたはがん化学療法による様々な症状に対して、支持療法を検討する。
(目標 B：知識・技能)
- (キ) がん疼痛緩和に関する薬剤の選択や投与経路などについて検討する。
(目標 B：知識・技能)
- (ク) 静脈内投与に伴う静脈炎の治療について説明できる。(目標 B：知識)
- (ケ) オンコロジーエマージェンシーの病態を説明できる。(目標 B：知識)
- (コ) がん治療における研修病院と薬局間の連携方法を学び、自ら研修期間中に薬局との連携を実施することが望ましい。(目標 C：知識・技能)
- (サ) 研修病院、地域薬剤師会又は地域薬局との間で行われるがん治療に関する研修会が開催されている場合、参加することが望ましい。(目標 C：見学)
- (シ) 抗がん薬調製や投与時に医療者が実施している曝露対策等を見学し、配慮事項を説明できる。(目標 D：見学・知識)
- (ス) がん治療に関する服薬指導に同席する。(目標 E：見学・知識)
- (セ) がん化学療法を行う患者に対して、服薬指導を実施できる。(目標 E：技能)
- (ソ) 医療者からの問い合わせに対して、適切な検索方法を使用し、必要な情報を迅速かつ適切に回答できる。(目標 F：知識・技能)
- (タ) 患者やその家族からの質問に対して、適切な情報源を活用し、回答案を作成し、必要に応じて医師や看護師と共有した上で、わかりやすく回答できる。(目標 F：知識・技能)
- (チ) 各がん種のガイドラインや文献検索方法、製薬会社の製品情報提供サイトの活用方法を理解する。(目標 F：知識)

3. 研修修了までに修得すべき専門的知識

研修者は、この実地研修および別の講義研修の受講等の自己研鑽を通じて、乳がん、肺がん、胃がん、大腸がんおよび血液がんについて、以下の内容を修得するものとする。なお、各項目について、研修病院での講義研修の実施を必須とするものではない。

- (ア) 疫学、臨床所見、診断、合併症と予後など、がんの一般的経過を述べられる。
- (イ) 組織病理学的分類と病期分類について説明できる。
- (ウ) 外科的治療、放射線治療、薬物療法のそれぞれの特徴と、これらを組み合わせた集学的治療について説明できる。
- (エ) 転移の過程と適切な患者ケアおよび症状マネジメントについて説明できる。
- (オ) がん治療目的で使用する殺細胞薬、ホルモン薬および分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬等に関して作用のメカニズム、副作用、用法、用量、PK/PD などの臨床薬理について説明できる。
- (カ) 抗がん薬およびその併用療法について、理論的根拠、用法、用量、スケジュール、副作用などを説明できる。
- (キ) 支持療法(悪心・嘔吐、発熱性好中球減少、その他の有害事象対策およびハイドレーション、プレメディケーションなど)について、各種ガイドラインの治療法を把握し、説明できる。

(ク)がん性疼痛について説明できる。またがん性疼痛に関する薬剤の選択、オピオイド鎮痛薬の副作用、オピオイドスイッチングについて説明できる。

4. 改正について

本コアカリキュラムは、適宜見直しを行う。

5. 制定年月日

令和2年6月20日